

オランダサッカーのコーチングビジョン (DUTCH VISION) について

飯田 義明¹⁾・玉井 朗²⁾・大石 弘道³⁾

About a coaching vision of the Dutch soccer

Yoshiaki Iida¹⁾, Akira Tamai²⁾, Hiromiti Oishi³⁾

1. はじめに

日本のサッカーが近年短期間に目覚ましい進歩を遂げたことは疑いようのない事実である。夢としか考えられなかったワールドカップ出場も、1998年開催のフランス大会に初出場し、その後2002年の日韓共催大会を経て、2006年ドイツ大会とたて続けに3回連続出場を達成した。またアジア選手権では3連覇を狙うというまさに日本はアジアの中でサッカー大国の地位を確固たるものにしたと言える。この素晴らしい成果は、日本サッカー協会技術委員会の掲げる「三位一体の強化策」による普及の賜物だと考えられる。その中でも特筆に値するのがユース年代の育成制度の確立であろう(玉井:1991)。その制度の中心的役割を担っているのが「トレーニングセンター制度(以下:トレセン制度)」の充実であろう。「トレセン制度」とは、1976年に試験的に導入され、1980年から本格的にスタートした育成制度である。その目的は「日本サッカーの強化・発展のため、将来の日本代表選手となる優秀な素材を発掘し、所属チームや年齢等の枠を

越えて良い環境、良い指導を与えること」である(JFA NEWS:2004)。発足から約30年を経て、トレセン制度は、9地域(北海道・東北・甲信越・関東・東海・関西・四国・中国・九州)、47都道府県サッカー協会及び数多くの指導者の熱意に支えられ、益々充実した制度となってきている(図1)。

特に1996年度から始まったトレセン改革は加藤久氏を中心に行われ、各地域対抗戦形式であったナショナルトレセンを現在のような研修会形式に改めさせた。ナショナルトレセンは選手達により良いトレーニング環境を与える強化育成の場・指導者のレベルアップの場として活用されている。また、情報発信・情報の共有化のための機能も高く、各地域トレセン指導スタッフにナショナルトレセンを通じて活動テーマを明確に示している(図2)。このように「トレセン制度」は全国的に力を中央に結集させることを可能にしているわけである。

日々のグラウンドレベルにおけるチーム・選手指導は生き物であるがゆえ、理論を振りかざ

1) 専修大学経済学部 Senshu. University School of Economics

2) 拓殖大学政経学部 Takushoku University Faculty of Political Science and Economics

3) 静岡市立商業高等学校 Shizuoka City Commercial High School

しても通用するものではない。しかし、理論がなく経験則に頼るばかりの指導では日進月歩の現代サッカーでは通用しない。現場と理論のその両方を往復運動することにより新たな発見をし、指導者は成長するのである。現代のサッカー指導者の合い言葉は「コーチングの共有化」と「オープンマインド」である。

そこで本資料は、オランダのパベンダールにあるスポーツシュレで行われた「47都道府県トレセン指導スタッフ」による海外研修(オランダ研修)の内容報告である。幸い玉井は東京都サッカー協会から派遣されこのオランダ研修に参

加することができた。玉井、大石による研修メモノートを元に飯田も含め検討し、まとめたものが本編である。

貴重なこのメモノートを整理しないままに手元に置いて、自チームにはそのメモを生かしながら月日ばかりが経ってしまった。乱雑なメモも時間をかけてやっと他人に見てもらえるものにと整理し直したつもりである。

世界有数のサッカー大国オランダのユース育成のノウハウの共有化が少しでも図れば幸いである。

図1トレセン制度～日本型選手育成制度

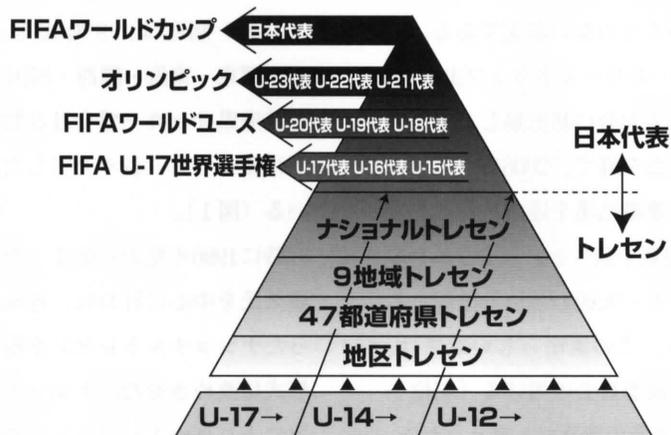
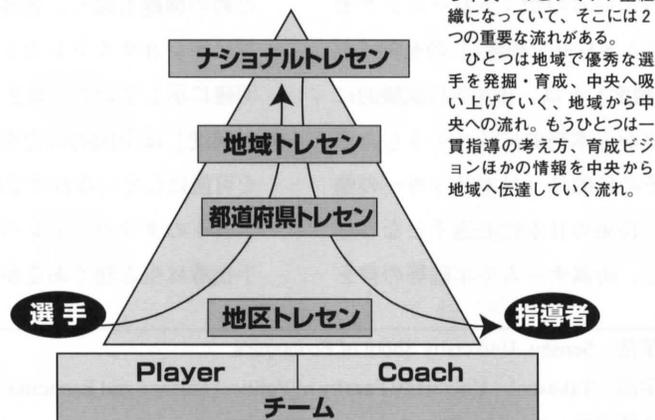


図2情報の流れ



2. オランダのサッカー

人口約1500万人のオランダは、人口や国土面積においては小国でありながら、サッカーにおいては世界の中の大国(ワールドカップの優勝こそまだないが…)であり、高いサッカー文化を持つ国である。しっかりとしたサッカーのビジョンを持ち、世界的なレベルでその理論は参考にされている。

ナショナル協会が主体となり、各クラブと連携を保ちながらサッカーの普及・選手の育成、指導書養成を行っており、その理論は明確であり、また独創的でもある。

オランダのサッカーの考え方は「ダッチビジョン」と呼ばれ、複雑なサッカー指導を極めてシンプルにまとめており、コーチがサッカーを頭の中で整理・理解するのに、大変に役に立ち世界的に注目されている。以下はその基本的ビジョンを講習から整理・まとめたものである。

3. 講習内容

セン指導者海外研修オランダ編 (5/24～31; バペンダール他)

講師; Mr.Arent・Bekhof (オランダサッカー協会・サッカーアカデミー・スタッフ)

経歴; 選手としては、ハンス・オフト氏とかつてAZでプレー(指導者歴22年)

現在オランダサッカー協会インストラクター、又国際インストラクターとして世界各国での指導多数

1. DUTCH VISION

1) サッカーの根本的考え方

◇「サッカーとは何か?」

サッカーに一番大切なことは、「ゴールすること、しかし、90分間ゴールし続けることはできない。

その中には、ボールが相手に渡っている場面もあり、当然守備もしなければならない。

そのためサッカーにおいて選手は、目的を達成すべく、以下の常に「3つの場面」のいずれかでプレーをしている。そして、一番大切な「ゴールする」の場面は、例外を除いて「自軍がボール保持している時」に起こる。ある時は、「ボール保持の切り替え」の瞬時にそしてそれを利用して、ある時は「自軍がボール保持している」中で適当な時間をかけて…。しかし当然、ボールを奪わなければ「ゴールする」ことはできない。つまり、この「3つの場面」のゲームでの存在とその中でのプレーが「サッカーする」に大いに関わっている。

ゲームの状況 (3場面)

- 1) 相手がボール保持している時
- 2) 自軍がボール保持している時
- 3) ボール保持の切り替えの時

上記「3つの場面」をふまえた上でトレーニングしなければならない

- 1) 自軍がボール保持した時
→ 得点できるシチュエーション
- 2) 相手がボール保持した時
→ ボールを奪う (ゴールを守る) シチュエーション
- 3) ボール保持の切り替えの時
→ 得点できるシチュエーション
- 4) ボールを失った瞬間
→ ボールを奪う (ゴールを守る) シチュエーション

また、「サッカーをする」を「トレーニングの意図」の中に入れて行うことが大切

したがって、「サッカーをする」の要素が入っていないトレーニングは、サッカーのトレーニングと言えない

(トレーニングのためのトレーニングに陥ってしまう危険がある！)

「サッカーをどのように学ぶ」か？ 答えは一つしかない

サッカーは、「サッカーをプレーすること」からしか学べない。(サッカーを覚えるにはサッカーを行うしかない)

◇サッカーを構成する要素とは(サッカーをプレーすることに必要なものは?)

- ボール
- 敵
- 味方
- 時間
- ルール
- エリア
- スペース

* これらの要素を考慮してサッカーのトレーニングを組み立てなければならない。構成要素が含まれる

トレーニングで選手は「サッカーをする」ことができる



「サッカーとトレーニングは別物でない」なぜなら、それは「サッカーをする」為のトレーニングであるからであり、サッカーに関連したトレーニングでなければならない。

「サッカーの上達の近道は、サッカーをプレーすること」を指導者はよく理解する必要がある。

「サッカーの根本的な考え方」を理解することか

らトレーニングは、必ずサッカーに関連づけたものでなければならない

2) サッカーのトレーニングの必要事項(指導者がトレーニングに際して考えること)

1. サッカーであること

- ・ 3つの場面があること
(攻撃と守備があること)
- ・ サッカーのためのルールがあること
(状況設定)
- ・ 障害となるものがあること
(難しさ、ストレス)

2. サッカーを楽しむ;

FUN (学ぶことと楽しむことが一体となる)

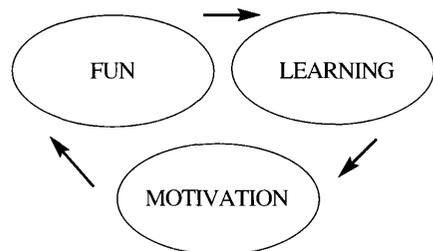
サッカーが楽しいことで選手は学ぶことができる

=指導者がより良くサッカーを提供することでサッカーを学び、プレーすることができる



サッカーが楽しければ、夢中でプレーするようになる。モチベーションも上がり学ぶことが容易になる

サッカー学習のためのサイクル



* トレーニングはサッカーであり続けなければならない。サッカーであり続けるからこそ、選手は楽しみ、それに没頭する。その

結果サッカーを自分のものとするこ
ができる。

そして良いコーチングをするため
には、「サッカーの知識」が必要と
なる。

3. 多くの繰り返し；Many Repetition

(1, 2を多く繰り返す)

「サッカー」の多くの経験が選手を
育てる。

5. 適切なグループ分け (注意する点)

グループ分けの注意点

- ・ 欲求・話す内容等への選手の対応能力
- ・ 選手のサッカーレベル・年齢・サ
ッカ
ーの資質

4. 良いコーチング

コーチングとして

- ・ 良いデモンストレーション
- ・ 指導 (声のかけ方・導き方)

【付録一「クラブ訪問；アヤックス (5/25)」】

10:15AM パペンダールをバスで出発、アムステルダムに向かう

11:30AM アヤックス・トップチームのトレーニング見学 (~0:30PM)

アヤックス・トップチームトレーニング

(1) ウォーミング・アップ

① 10名×2グループに分かれてのウォーミング・アップ

ハーフウェイラインとゴールライン間を往復ジョック

サイドステップ

70%程度のランニング

足の振り上げ等のバリエーションをつけたランニング

② 各選手個別でのストレッチ

③ 2名から3名のグループで、ミドルパスとロングパス (フリーランニングを交えて)

コミュニケーションがとれている

(2) 紅白ゲーム

・ 25分ハーフマッチ

・ 監督はレギュラーチームに声をかけながらゲーム・

・ システム

1-3-4-3 対 1-4-4-2

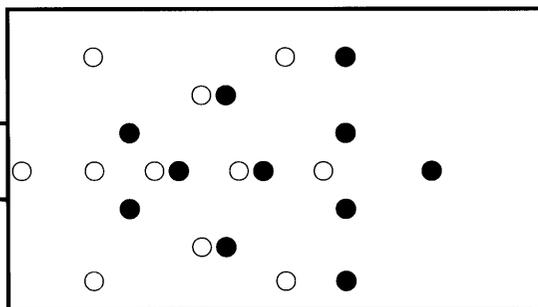
* 1-3-4-3に監督がつく

次のゲーム (対AZ戦) に対しての模
擬ゲーム

ゲームの中でFK、CKのトレーニングも行う

* 実際の対AZ戦は、相手のシステムが

1-4-3-3 (2-1)



2. MATCH ANALYSIS (ゲーム分析)

◇分析要素は？

サッカーの「3つの場面」

- ・自軍がボール保持している
- ・相手がボール保持している
- ・ボール保持の切り替え

この「3つの場面」において分析を行う

◇どのように分析するか

(ゲーム分析フォームを利用して)

1. 天候・大会名・観客数・怪我人・注意する点・得点者・グラウンドコンディション・退場者・前半のスコア・試合のスコア
2. 分析するチームメンバー
(背番・名前・サブメンバー)
相手チームメンバー (同じ)
3. 前半の両チームのフォーメーション図と前半の分析チーム・ポイントメモ
4. 後半の両チームのフォーメーション図と後半の分析チーム・ポイントメモ
5. ボール保持したときのプレーの特徴図とプレーの特徴メモ
ボール保持したときのプレーの注意点
6. 相手がボール保持したときのプレーの特徴図とプレーの特徴メモ
相手がボール保持したときのプレーの注意点
7. セットプレイとゴール場面図
8. どの場面のどのようなプレーについてトレーニングを作成するか
作成するトレーニングの注意点
9. トレーニング作成
 - ・どの場面か
 - ・目的 (何を改善するか)
 - ・内容と方法 (トレーニングの進め方)

- ・オーガナイズ
- ・指導と修正 (何をどのように指導し、修正するか)
- ・トレーニング・指導の注意

3. ANALYSIS → TRAINING

(分析からトレーニングへの移行)

DATCH VISION

1) SOCCER

2) GAME

3) ANALYSING

(ゲーム分析; 何を分析するか)

どのようなトレーニングを行うかを考える

①フォーメーション

②チームとしてどのようにゲームを行うか

③サッカーの「3つの場面」

④リスタート (フリーキック; 自軍・相手)

⑤個人の評価

4) 課題の抽出 (FORMULATE)

<課題を明確にするための視点>

WHO 誰が PLAYERS

WHAT 何が (何が良かったか悪かったか)

WHEN いつ (いつ問題が起こった) ROBLEM

WHERE どこで (ピッチのどこで起こったか) MOMENT

PART OF PITCH

自軍がボール保持している

相手がボール保持している

ボール保持の切り替え

* 「3つの場面」において5Wに関して見る

5) トレーニング目的の設定

(課題; 4Wに対する)

目的設定によって導かれる

・トレーニングの状況設定

- ・トレーニングの作成
- ・トレーニングにおけるコーチング

6) トレーニングの実施

- ・サッカーであること (Soccer)
- ・楽しむ (Fun)
- ・多くの繰り返し (Repeats)
- ・適切なグループ分け (Grouping)
- ・正しいコーチング (Coaching)

トレーニングの手順

①簡単な説明と経験

(デモンストレーションを含む)

②コーチング

③ゲーム

ex) 評価

例) アレントによる「AJAX-A1」の分析とトレーニング作成

◇アレントの「AJAX-A1分析メモ」

〈ボール保持した時のゲーム分析〉

- ・アヤックスのフォーメーション

= 1 : 3 : 4 : 3

- ・アヤックスがボール保持したときのプレーの特徴

両アウトサイドからの攻撃がチームの特徴

↓

したがって、両サイドからのクロスボールの質を上げることで得点が増す

◇アヤックスの「自軍がボール保持している時」の課題

- ・クロスボールに問題 (FLANK BALL)
 - WHO CFとウイングの選手
 - WHAT コミュニケーション
 - WHEN ウイングの選手がボール保持した時
 - WHERE ゴール前

4. 試合に向けての準備 (Match preparation)

自分たちが思っているチームのスタイル、ゲームプランをプレーするためにそれに関するミーティング、ディスカッションをしなければならない。尚かつトレーニングをつんでいかなければならない。

試合でのプレー・試合前のミーティング・試合前のトレーニングが関連性を持たなければならない。つまり、試合でどのようにプレーしなければならないかを選手自身が知らなければならない。チームとしてのゲームプランを選手個々が熟知していなければならない。

試合前の準備、トレーニングの前の準備

◇準備の考え方

「何故」、「どんな」準備をするのか？

自分たちのカラーでプレーするための確認

(選手が試合でどんなプレーをするかを知る)

チームとしてのゲームプランの確認

そのための方法と項目？

ミーティング	自軍がボール保持した時
	相手がボール保持した時
	ボール保持の切り替え
	(攻→守、守→攻)
	セットプレー(攻撃・守備)
	最後のコメント

◇「カウンターアタック」をテーマにした「MATCH PREPARATION」(アレント)

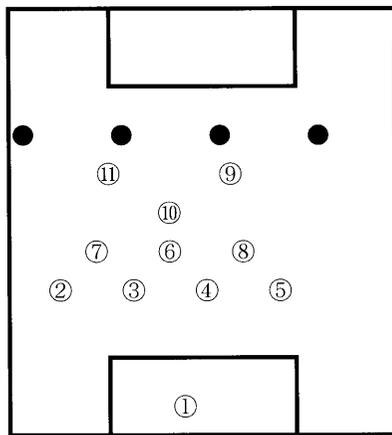
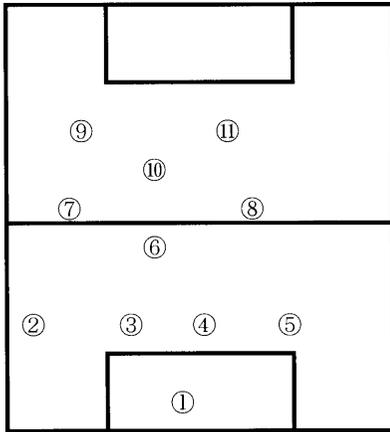
「選手がどのようにプレーするかのアドバイス」(10分ぐらいが適当)

1-4-4-2のフォーメーション

DF - ②③④⑤

MF - ⑥⑦⑧⑩のダイヤモンド型

FW - ⑨⑪



〈敵がボールを保持した時〉

- 「全員できるだけ早く自陣に戻る」

(自陣ハーフまで)

組織化しできるだけ早く敵にプレッシャーをかけられるようにする。しかし、奪われた瞬間「深いパス」を阻止するため、ボール奪取するためにプレッシャーをかけることができる場面も出てくる。つまり、奪われた瞬間はまずはボールへのプレッシャー、それが駄目ならば帰陣するその見極めに注意する。(チームコンセプトもあるがボール奪取も忘れない)

- 「コンパクト」

帰陣し、3ラインをコンパクトに保ち、マーク、役割の認知と実行

- 「マーク」

基本的には⑨⑩はサイドに追い込み、⑩はそのスペースカバーを行う中盤・ディフェンスラインの選手は、できるだけマークを厳しく、GKはこれらが上手くできるようコーチングする
- 「絞り込み」

サイドの攻撃に対して全体が同サイドに絞り込み、中央の場合も同じように全体が中央に絞り込む。そして、ボールが奪えるタイミングで適格にプレッシャーをかける(全てプレッシャーをかけるタイミングでない)

何故このように行うか？

①コンパクトに、絞り込むことで守備がしやすくなる

②敵陣にスペースを作る＝アタックしやすい(ボール奪取から広いスペースへの攻撃が目的)

★相手がボール保持した時の「やり方」の再確認

1. ボールプレッシャーもしくは素早い帰陣
2. コンパクト
3. マーク
4. 絞り込みとプレッシャー(ボール奪取)

〈自軍がボール保持した時〉

ボールを奪った時

- 深いパスをまず第一に考える

- 広いスペースを使う

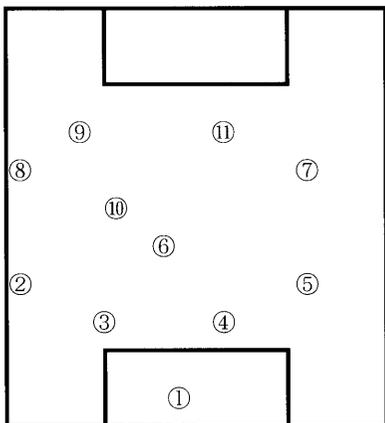
⑨⑩は、必ず前方に動き出し、第1優先は「深いパス」、このパスができなければ「広がり」を使って「ボールキープ」しボールを失わないようにする。

ボールを奪った瞬間、チーム全体が「広く・深く」ポジションを取る。

②⑤はできるだけ広く、③④はスペースを確保しながら位置取り、⑧⑦は深く・広く、⑨⑩はボール奪取の瞬間必ず前に動く(カウンター)

アタックの為の重要な動き)

GKに関して、GKがボール保持瞬間、まず第一に⑨⑩へのパスそして、⑦⑧、⑩の順に考えなければならない



③④がボール保持した時も、まず⑨⑩を、そして⑦⑧、⑩を考えなければならない

「深いパス」が不可能な場合、ボールをキープする(ボールを回していく=敵が戻っているところにわざわざボールを運ぶ必要はない)

ボールキープする場合には、⑥⑩②③④⑤を使ってあわてることなくボールを確実にキープし、攻撃の組み立て、この時の中心は③④⑥⑩、特に⑥⑩を経由しながらの組み立て、そこから攻撃を展開をしていく

相手が守備を組織化したら、100%の集中で攻撃を組み立て展開し、中盤では絶対にボールを奪われてはならない(ボールを奪われるなら前線)。

忘れてならないことは、誰がどこでボール保持しても常に「深いパス」を第一に考えること

★自軍がボール保持した時の「やり方」の再確認

1. 第一に「深いパス(速攻)」
2. 広がりを利用したボールキープしながら攻撃の組み立て(遅攻)

〈ボール保持の切り替え〉

◇ボールを奪われた時

ボールプレッシャーするか、帰陣してコンパクトにするかを考える
(一瞬のひらめきであり、自分たちで判断しなければならない)

◇ボールを奪った時

深いパスなのか、ボールキープなのかを考える
(一瞬のひらめきであり、自分たちで判断しなければならない)

★ボール保持の切り替え時の「やり方」の再確認

*キーワード「できるだけ素早く」

〈セットプレーに関して〉

攻撃;シュートエリア以外のFKは、ボールに近い選手が責任持つ(素早く)
シュートエリア内のFKは、⑩が責任を持つ(ゴールを狙う・パスETC)
コーナーキックは、右は右サイドの⑦、左は左サイドの⑧PKは、⑥

★セットプレーに関しての再確認

シュートエリア以外
シュートエリア内
コーナーキック(左・右)
PK

守備;CK、FKに際しては、GKが責任を持って守備の形を作る

〈最後のコメント〉

*集中させるためのコメント

「このミーティングで君たちに話したことがこの場だけにならないように明日のトレーニングをがんばってほしい」

- ・敵のチームに関して
- ・トレーニングに関して
- ・選手個々に関して

MATCH PREPARATION
- FORMATION
- 3MEIN MOMENT
- SPECIALY REMARKS

「MATCH PREPARATION」の流れと留意点
チームのプレースタイルとプレーについての理解のために

- ①フォーメーション（どのようなシステムで行うか）
- ②3つの場面でのプレーの留意点
 - ・相手がボール保持したとき
 - ・自軍がボール保持したとき
 - ・ボール保持の切り替え(攻→守、守→攻)
- ③リスタート（攻守）
FK、CK、PK
- ④最後のコメント
 - ・相手チームに関して
 - ・選手個々に関して
 - ・様々な情報
 - ・試合・トレーニングへの集中に関して

〈作成上の留意点〉

各項目を図で表す

- ・フォーメーション
- ・3つの場面
- ・リスタート

そしてその留意点を書き記す

(構成；ストーリー性を持たせる)

図と留意点がリンクしている

留意点の内容がわかっている

(選手自身ががどのようにプレーするかをイメージできるようにさせ、考えさせる)

このミーティングは、チームのやり方を選手に理解させることが第一の目的である。したがって、選手が理解できていれば目的は達成されたこととなるが、できていなければ目的は達成されなかったこととなる。つまり、説明はポイントを押さえ、できるだけわかりやすく行うべきである。試合の前だけでなく、ハーフタイムなどにもこの流れを踏まえて、ポイントを押さえ話をする。

試合のやり方がコーチだけのものでなく選手のものになるように、そして選手自身がそのやり方について考える、考えながらプレーさせることが大切である(選手自身はそのやり方がどうだったかということを考えながらプレーしている)。

指導者の考えを選手自身が理解し考えることのできる事が大切なこと

選手たちに情報を流す場合、指導者自身が事前に構成を考えておかなければならない。指導者が、「フォーメーション・3つの場面に関して・リスタートの部分・その他の留意点」を自分なりにまとめて選手に情報を流す。それぞれに関しては事細かにするのではなく、大まかなイメージを通じての留意点を話し、選手も大まかなイメージに基づいて明確に理解することとなる事が大切である。10分間の短い時間の中で、選手たちにどのようなゲームの進め方、スタイルで行うかを観点的に話しなければならない。

「必ず自分で構成し、選手に与える。手短かに…」

選手は、話が長くなればなるほどうんざりしてくるでしょう。]

5. HOLLAND SOCCER

◇VTRから見るオランダナショナルチームのプレースタイル

- ・ 主導権を握る (自軍がボール保持したとき・相手がボール保持したとき)
- ・ 効果的なポジションプレイ
サイド攻撃 (サイドを広く使った攻撃)

- ・ 効果的なポジションプレイによる組み立て
→深いパス

深いパスが不可能時、自分たちでボールキープ

- * ボールキープし続ける時、100%の集中力が必要

パスの質に関しても、利き足はどちらか、パススピードなどの注意

VTRのボールキープの場面

深いパスができないので、グラウンドを広く使ってボールキープを続ける。

最後の得点までに厳しいパスの場面は、ラストパス (15m程の足元への縦パス) 1本のみであった。

◇Dutch style of playing オランダのプレーの仕方

- ①Take initiative イニシアチブを求める
- ②Take responsibility 責任を持つ (ポジション・役割等)
- ③Misstake ミスを恐れない
- ④Coach+Correcting each other コーチと的確なところで意見を述べ合い正していく

◇Dutch style of coaching コーチの仕方

- ①Support initiative イニシアチブを持てるよ

う援助する

- ②Correct misstake 的確にミスを指摘する
- ③Repeat 多く繰り返させる
- ④Concentration 集中させる
- ⑤Team building チームを築き上げる

◇Dutch vision ダッチビジョン

→A way

→The way

ダッチビジョンが全てでなく、それは一つの方法である。

その国なりのビジョンにはそれぞれ長所がある。ダッチビジョンはオランダの方法であり、世界共通ではない。ダッチビジョンを学び日本風アレンジしてほしい。そのためには、日本の文化、サッカーのスタイル、レベルを考慮すべきである。

サッカー・トレーニングの考え方

→Soccer=Training サッカーのトレーニングは、「サッカーする」ことである

→Learning=Soccer play サッカーすることで「サッカーを学ぶ」ことができる

トレーニングに至までの手順

→①Match Analyse

まずは、ゲーム分析から

- ・ Own team
自分のチーム、そして相手チーム
- ・ opponent
(ユースは、大まかな基礎的なことから)
- ・ Youth soccer
(General skill=ヘディング、ドリブル、パス、etc)

→②Formulate problems

サッカーの「課題の明確化」
 →③Translate in training sessions
 トレーニングへの移行する
 (問題点の解消のためのトレーニング作成
 と実施のために)
 説明→経験→コーチング→ゲーム
 →Style Training
 トレーニングは、チームのプレースタイ
 ル合ったものでなければならない
 Match preparation
 (スタイルに関連したトレーニング=試合
 のための準備)

→Recognize
 選手、コーチは、自分たちのスタイルを
 理解しなければならない
 Team = Players + Coach
 (トレーニングし、ゲームし、評価する)
 →Evolution
 評価があって、次の準備を行う
 ↓
 Preparation
 何度も何度もこのサイクルを繰り返す
 「準備がなければコーチはできない。良い準備
 を！」

◇日本チームの印象 (アレント談)

体力、技術、精神力は問題ないが、ゲームに早いところと遅いところを作るといったゲームのテンポを変えることができないのが気になる。つまり、間違ったテンポでゲームを進めていることが多く、特に常にハイテンポの中でゲームを行っているため、非常にミスが起きやすい。自らミスすることによってボールを相手に簡単に与えてしまう。これはゲームをうまく読めないことに関係している。例えば、リスクを負って良い場面と悪い場面を判断しなければならない。守備ゾーン、中盤ゾーンでは絶対にリスクを犯してはならない。GKを含めて100%の集中でボール保持する。攻撃ゾーンではリスクを犯しても良い。リスクを犯しても思い切りよくゴールに向かうべきである。

以前日本の高校生のチームをコーチしたことがあり、アヤックスとのゲームで終了5分前まで3対1で勝っていたが終わってみれば3対3の引き分けだった。そのゲームは時間を考えてテンポを変えるべきだったが結局変えられなかった。最後までハイテンポでミスを繰り返し、みすみす相手に点を与えてしまった。

この様な日本のチームの特徴からヨーロッパのチームが日本とやるときは、日本が自らテンポを壊し、自滅するのを待っている。

その点、オランダの選手はゲームを読む力に優れている。

参考・引用文献

1. 池谷 孝: コーチの仕事・ダッチビジョン作成の意図について。(財)静岡県サッカー協会西武支部技術委員会 2000年.
2. 小野 剛: クリエイティブサッカー・コーチング. 大修館書店 1998年

3. 玉井 朗 日本におけるサッカー一環指導の試み、平成2年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告書 1991年.
4. 2004 ナショナルトレセンU-14 プログラム. JFA NEWS, 2004年.